
詩集「月影」

コハビ°-

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集「月影」

【作者名】

コバピー

【あらすじ】

片想い…淋しさに明け暮れ、痛みに堪えて…。

同性愛者の私に、そんな権利はないのかも知れない…。

例え許されるのだとしても…愛した人に愛されないのならば…意味はあるのでしょうか…？

この詩集はハ片想いVの前作「棘」とは違い…きっとハサヨナラV
が出来るようにするためのものになります…。

皆さんのハ片想いV…今、どこにありますか…？

切ない月に風は添い

語ることのない川面

時と共に流れゆくだけ…

まるでトルソーのような街並み

肌寒い雨空に霞む…

僕を見下すような

この冷ややかな街の中に

居場所なんてありはしない…

切ない月に風は添い

見えぬ淋しさ身に沁みる

もし生まれ変われたら

今度は傍にありたいと…

終わりはほんの一瞬

それは何の前触れもなく…

いつかはと…覚悟してたのに

こんなにも胸が苦しい…

何も変わりはない

世界は在るだけの幻影：
儂く散りし蜃気楼：

切ない月に風は添い
消えゆく想い胸に抱く
不意に落ちた涙は
どこまでも水面を揺らし：

切ない月に風は添い
癒えぬ哀しみ身に沁みる
もし生まれ変わったら
今度は共に在りたいと：

l o n e s o m e s t o r y

ただ好きでいる…
ただ好きでした…
望めば望むほど遠く…儂く…
散りゆくような刹那の時に
僕は何を眺めよう…

それはほんの些細なこと
忘れようとしていた心が溢れ出す
もうどこにも逃げられない…
それは胸の中で息づいて…

l o n e s o m e s t o r y . . .
嘘さえ見抜く片割れの月
そう…あの人が好きなんだ
不意に零れた涙の先に
落ちた影は…たった一つで…

ホタルの光…
秋の夕暮れ…
こんなにも胸を締め付けて…止まず…
空には太古の想いが舞い

遥かなる切なさを：

触れた指先の温もり：

それは僕ではない誰かのものだから
散り急ぐ櫻のように：

そんな風に生きれたらいいな：

l o n e s o m e s t o r y . . .

嘆きは大きな津波となって

心の奥へと押し寄せる

堅く閉ざした扉を破り

恋しいと：求めてしまった：

七夕（シチセキ）の願い事：

幸せになりたいだなんて

神様でも無茶なことだよ：

l o n e s o m e s t o r y . . .

それは小さい出来事だった

もうそれは：過去の幻

過ぎた想いは青空に解け

痛む心は：いつかは癒えて：

l o n e s o m e s t o r y . . .

嘘さえ見抜く片割れの月

そう：あの人が好きなんだ

不意に零れた涙の先に

落ちた影は…たった一つで…

愁うため息 翳る月

明日なんて勝手に来る

人なんて所詮過ぎ行く幻…

冬枯れた野原は結末を見せ

心の奥を掻きむしる…

限りなく寂しさに似た

刹那を抱えて…どこへ行くの…？

愁うため息 翳る月

安らげる場所は見つからず…

温もり求め手を差し出せば

指先を風が撫でるだけ…

戻らない刻は夕暮れ

全てが色褪せ儚さに霞む…

いつかは消え逝くと知っていても

涙は流れ零れてく…

打ち付ける日々に追われて

無駄と解すも…思いを馳せる…

愁うため息 翳る月

歪んだ世界に嘆くだけ…

僕を擦り抜け去りゆく影を

一人淋しく見送った…

いつまでも続くこの人生（ミチ）の先

一体何があると言うのでしょうか…？

風を追うように月日を駆け抜け…

最期（オワリ）に何が残るのでしょうか…？

愁うため息 翳る月

いつしか微睡み夢現…

恋しい影は泡沫に消え

時計の鐘で目を覚まし…

愁うため息 翳る月

安らげる場所はありません…

温もり求め手を差し出せば

今日も風が吹き抜ける…

明かり一つ灯して眠れ

罅割れた時間…重く項垂れた恋心
恰も嘲笑するかのような冬の風は
喪われた日々を吹き抜ける…

人の生命（イノチ）は硝子の月…
いつかは儚く砕けて消える…

明かり一つ灯して眠れ
夢は現と涙して…
光に浮かぶ思い出たちは
一つ一つと解けて逝く…

想いは歪み…夕の紅へと染まりゆき
迫り来る宵の闇はその口を開いては
全てを呑み込まんと欲する…

哀しみに凍てつく心は
それでもいつかはと…想い燃ゆる…

明かり一つ灯して眠れ
砕けた願い輝かせ…

希望は涸れて野に頼れて
祈ることさえ忘れゆき…

想いとは何なのだろう…？
我が儘で臆病で泣き虫で…
それでいて愛おしく…

明かり一つ灯して眠れ
月は陰りて夜は更ける…
逢えぬこの身は闇へと落ちて
思い出からも消えてゆき…

明かり一つ灯して眠れ
忘らるるとも想いは果てず
至福願うは痛みし魂（ココロ）
あの人の幻（カゲ）抱きつつ…

明かり一つ灯して眠れ
夢は現と涙して…
幾星霜に思いを馳せて
いつかは癒えし灯（ヒ）を見つけ…

s o r r o w f u l l e t t e r

ただ：あの人がそこにいる
それがとても眩しくて：

冬の夜空 散りばめられた星々
いつの時代にも瞬いていた：
どれだけの人々が見上げてきたのか
想いは尽きることがない：

もう会うことはない：
それは決め事：
それでも僕は姿を求めて：

s o r r o w f u l l e t t e r あてもなく
彷徨うように想いを紡ぐ：
淋しさに打ち震え涙を流しても
これで良かったと：きつと思える：

帷は降り：黄昏に浮かぶライト：
移ろいゆく今を映し出して：
雑多に行き交う人々のその中は
カラッポのような気がした：

僕が居なかったら…

そう願っても

世界は一つも変わりはない…

sorrowful letter 永遠（トワ）に添う

語り継がれる星座の物語（ハナシ）

囁いては消え逝く 頬を撫でるシルフ…

当たり前はいつか…崩れ去るもの…

ただ…あの人がいなくなって…

それがとても哀しくて…

sorrowful letter 揺蕩うて

揺らめく水面に想い流離う…

もう声は聞こえずに探す影もない…

朽ちた野原に…月影が舞う…

sorrowful letter あてもなく

彷徨うように想いを紡ぐ…

淋しさに打ち震え涙を流しても

これで良かったと…きっと思える…

だからそっと…アドレスを消した…

ただ…静かに…

思い出す夕暮れの影は

人の心は複雑怪奇で

どう思うかなんて知らない

感情なんて形のないものに

踊らされているようで…

気がつけば恋に落ちて

さりげなく目で追って…

叶わぬ想いは胸をしめつける…

思い出す夕暮れの影は

とても遠く淋しい色して

長い長い人生（ミチ）の先で

もう一度あの人に逢えたら…

笑えるかな…？

くすんだ空にいつしか雪が舞う

とても綺麗だと思ふけれど…

心の奥でフタをしてる恋心（オモイ）

いつしか暴れ出している…

何で涙が出るんだろう…

伝えられないキモチ

どうしたら良いのか分からないよ…

思い出す夕暮れの影は

遙か彼方 霞んで見える…

偶然に出会うこともない

そんなあの人に手を振って…

元気でねと…

ずっと一緒にいたかった…

子供のように駄々をこねても…

でも…それは身勝手な

僕の一方通行な想い…

思い出す夕暮れの影は

儚く揺れる陽炎のようで…

駆け出して掴まえようと

僕をすり抜けて消えてゆく…

思い出す夕暮れの影は

とても遠く淋しい色して

長い長い人生（ミチ）の先で

もう一度あの人に逢えたら…

笑えるかな…？

伸びる影に捉まって日も暮れて

凍てつく風に追われるように
太陽は地平へと落ちて…
見上げた空には…気の早い月
街を眺めていた…

過ぎゆく人波に吞まれそうな思い出
今更…何を…大切に…生きるの？

伸びる影に捉まって日も暮れて
一人で過ごした夕焼けに囚われて…
寂しさに膝を抱えて泣いている
僕を置き去りに 今日も…終わってく…

胸に射し込む焼けつく朱は
懐かしい風景へ重なり…
零れた涙はいつかきつと
大きな虹になる…

後悔ばかりで蹴躓いて転んで
べそをかき…立って…歩いて…どこへ行く？

伸びる影に捉まって日も暮れて

瞬く星があを頃を映し出す…

空ろな時間（トキ）を耐えるだけの日々は

僕に絡まって 今日…終わって…

冷えゆく世界は夕月夜

枯れた儂い野辺に降り積もる

想いはいつしか地に溶けて…

伸びる影に捉まって日も暮れて

街の灯りさえ虚無の中へと沈み

佇んで雁字搦めの想いに

いつしか惑って 今日…終わって…

伸びる影に捉まって日も暮れて

一人で過ごした夕焼けに囚われて…

寂しさに膝を抱えて泣いている

僕を置き去りに 今日…終わって…

雨上がりの夕焼け

たったひとときの幻
それだけのことだったと思い
氷雨のような晩冬の雨に
涙を一つ…

春待つ枝先に注ぐ光…
未だ儚き夢なれど
いずれは蕾を綻ばせ
花を咲かせて明日を紡ぐ…

雨上がりの夕焼けは
不自然な程に胸を突く…
忘れ得ぬ想いに寄せて
そっと歌を口にする…

薄らぐ夢を追い掛けて
変わりゆく縁は解けてゆく…
救われることなんてない僕に
溜め息零す…

紅梅の上に白雪は舞い

過ぎ去りし影は棚引く…
幽かなる四季の黄昏に
想いこだまし涙を誘う…

雨上がりの夕焼けは
あの頃のように忍び寄り
消え逝く記憶に縋る
僕を無情に眺めてる…

一人だけ取り残されたような…
まるで空っぽの世界…
赤と黒に支配されたそれは…
まるで残像…

雨上がりの夕焼けに
魂さえも焼け落ちて
夢も現も幻さえも
きっと「今」から零れてく…

雨上がりの夕焼けは
不自然な程に胸を突く…
忘れ得ぬ想いに寄せて
そっと歌を口にする…

天駆ける風 永遠の蒼

いつしか時は過ぎ 闇が滲む
ひたる想い 夢幻の恋
ただ悲嘆して眠る：

あの丘の向こうに何があるの…？
求めて歩く躰を陰が縛る：

天駆ける風 永遠の蒼
透る心 捧げる
儂き夜は無情にも
想い残して消えてゆく：

血のような夕焼け 風は叫ぶ
翳る光 惑う現
欠けた月が昇る：

流れゆく河はいつか海へと…
全てはただ巡り廻るものだから…

天駆ける風 永遠の蒼
変わらないものはない…

冬が過ぎれば春となり
紡ぐ命に果てはない…

朝（アシタ）は光に満たされてゆき
淋しき夜（カゲ）は眠りについて…

天駆ける風 永遠の蒼

人間（セイメイ）を見守って…

緑は輝き波を打ち

花咲き誇り 夢を見る…

天駆ける風 永遠の蒼

哀しい涙（アメ）はいつか…

目映い青へと変わりゆき

風は虹を渡るだろう…

置き去りにされた思い出

流れゆく旋律の波…

零れ落ち行く時の狭間

哀しみも淋しさも…包み込んで…

翳る月日の直中に見えた幻

遠い夕影へと消えてゆき…

今だけを生きる人間（ボクたち）は

何処へ行こうと藻掻いてる…？

置き去りにされた思い出は

水面の底で静かに光る…

砕け散りし日々の欠片は

言葉にすれどただ霞みて…

浮かんでは沈みゆく…四季の中に…

所詮現は儚く 永遠（トワ）に憧れ

故に変わらぬ愛を求めて…

還らない時間（トキ）に揺らめいて

何を願って足掻いてる…？

置き去りにされた思い出は
黄昏の中 幽かに薫る…

ありふれた想い…

ありふれた嘆き…

いつかは終わると知っているのに…

虚しさを抱え逃げ出して

影に囚われ泣いている…

置き去りにされた思い出は

いずれ昇華し空へと還る…

今だけを生きる人間（ボクたち）は

何処へ行こうと藻掻いてる…？

置き去りにされた思い出は

水面の底で静かに光る…

もうない「いつか」の夢を見て…

F r a g m e n t F a n t a s y

流れ去る年月は幻

人は在るが儘にはなれず

桜のように散り逝くは

まるで最期の希望（ノゾミ）のように…

細やかな雨に湿った風

後に残るは虚し刻

月影も見えず 立ち尽くす…

F r a g m e n t F a n t a s y

刹那に返る恋心（オモイ）

傍らに通る風は遠く

淋しさだけを置いて行く…

行き交いし人波は寡黙

消えゆく時は泡沫で

枯れ葉のように散り去るは

まるで切なる願望（ネガイ）のようで…

晴れ渡る空に注ぐ光

映す未来は欠けていて

望んだものは得られずに…

F r a g m e n t F a n t a s y

罅割れた砂時計

漏れ出した夢に見えた影

戻らぬ時を埋め尽くし…

F r a g m e n t F a n t a s y

忘れ得ぬ思い出の君

決して重ならない未来に

ただ一人流されてく…

F r a g m e n t F a n t a s y

刹那に返る恋心（オモイ）

傍らに通る風は遙か

想いだけを吹き上げてく…

どこかへ続く明日へと

泣き出しそうな晩秋の空

囀る鳥は何を語る？

窓辺に見える梢が揺れて

不意に涙（アメ）は落ちてくる…

見える今をユラユラと

見えない未来へ流されて…

どこかへ続く明日へと歩く

飛べない僕の空はない

仰いだ月は朧気で

落ちた影さえあやふやで…

ベールのように覆う雨雲

過ぎゆく風に香る冬

街角の歌はまるで哀歌

きっと今日も涙（アメ）が降る…

たった一人フラフラと

心を隠して彷徨って…

どこかへ続く明日へと祈る
希望（ツバサ）を持った君の空
雲間に見えた光る蒼
どこに居ようと変わらずに…

もう交わらないこの道の先…
思い出の中にだけ咲う君…
僕の明日は何処へ…

どこかへ続く明日へと走る
募る想いを抱きつつ…
静かな刻の寂しさに
見えない月を仰ぎ見て…

どこかへ続く明日へと記す
飛べない僕の空はない
恋しさが放つ哀しみよ
いつか優しい詩（ウタ）となれ…

枯れ葉散る夕べ

微睡みへ誘うような
柔らかな晩秋の陽射し
抱えゆく痛みに沁みて
目を細めて空を見る…

過ぎ去りし年月に咲く
色とりどりの思い出
君にとって僕は…
何色だったかな…？

枯れ葉散る夕べの風に
願うは過去の過ちを
許せる時を歩めるように…
移り行く空の紅と藍
狭間に暮れる僕は
ただ一人…夢を見る…

夏影は遠く霞んで
迫りくる冬の寂しさは
沈めた想いを浮かばせて
終わる未来を望ませた…

曇りのない澄んだ月影
変わらずに在る星々
揺蕩うように流れ：
想いさえもいつかは：

枯れ葉散る夕べの光
燃ゆるは遠き黄昏で
願いし時は陰の中へ：
憂いたる今の寂しさは
強く抱いた想い
その罪の罰として：

枯れ葉散る夕べの空へ
忘れ得ぬ想いを放ち
いっそ寂しさを友として：
掠れ逝く秋を眺めつつ
痛みし想いを昇華させ
そっと一人：微睡んだ：

Sleeping Hope

ねえ…幸せですか…
なんて、ひとり呟く…
年は明けて時は過ぎ
新たな光りが降り注ぐ

寂しさは相変わらず…
でも…君の幸せ祈るだけ
僕は強くなれたかな…？

Sleeping Hope ただ静かに
君への想いは奥深く
愛しさ抱いて眠るだけ…
いつの日にか目覚め
新たな想い紡ぐよう…

そっと打ち寄せる
小さな心の痛み…
朱い夕焼けの中に
溜め息と一緒に還して…

忙しない年の始まり

ふと…胸に迫りくる感情に
抗えないのは…なぜ…？

Sleeping Hope ただ優しく
恋しさを包み込むように
黄昏の中で目を閉じる…
君がいつまでも
幸せであるよう願って…

揺蕩う刹那に揺られながら
いつかの光り夢見ては
深い睡りへと落ちてゆき…

Sleeping Hope 眩い空
白い雲は光りを浴びて
過ぎ去りし記憶（トキ）の夢を見る…

Sleeping Hope ただ静かに
君への想いは奥深く
愛しさ抱いて眠るだけ…
いつの日か目覚め
新たな想い紡ぐよう…

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~20837

詩集「月影」

2019年01月04日 00時22分発行